

東京バッハ合唱団 月報

[第 741 号] 2024 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.741

March 2024

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

日本語版バッハ・カンタータ楽譜全集(ブライトコプフ版底本)

完結計画、新しい装丁でスタート!

次回定期演奏会(第 123 回、本年 11 月予定)で取り上げる 2 曲のカンタータの楽譜(右掲は表紙デザイン見本)が出来上がりました。

- ・第 23 番《主なる神 ダビデの子》BWV 23
- ・第 34 番《おお永遠の火よ おお愛の源よ》BWV 34

23 番のタイトルは、イエスと弟子たちの一行がエリコの町に近づいたときに、道端の盲人が発した叫び(四旬節の前週に読まれる聖書箇所、ルカ 18, 38)、また 34 番は、聖霊降臨の出来事を記念する作品(霊の炎、使徒行伝 2, 3。イエスの別れの預言、ヨハネ 14, 23)であり、前回定演(第 122 回、23 年 5 月、川口・リア音楽ホール)のストーリー(「受難と復活の予告から、天への別れまで」)を、巧まずして、引き継ぐ内容となりました。いずれも、豊かな響きのオーケストラに乗せて歌われる大きな合唱曲をふくみます。

当日の演目は上記 2 曲のほかに、昨年末のシングインで一部をご披露したマリアの讃歌《マニフィカト》ニ長調 BWV 243 を、ソリスト 5 声部とティンパニを加えたフル編成による完全版で上演します。豪華なステージになるはずですので、ご期待ください(詳細は、近日中に確定・発表)。

◆ブライトコプフ社から破格の申し出

さて、デカデカと楽譜の表紙をここに掲載したのは、わけがあります。

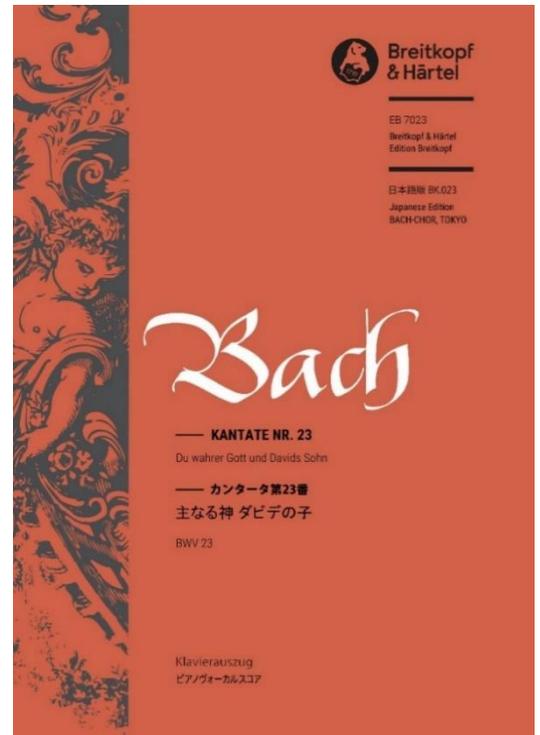
西洋音楽を愛好なさる方々なら、熊の横顔のロゴのある楽譜を見かけたことがおありでしょう。バッハ全集やモーツァルト全集を最初に世に出したドイツのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社、ライプツィヒで 1719 年に創業された現存最古の楽譜出版社です。1719 年創業ですから、われわれのバッハとまさに同時代(バッハのライプツィヒ市音楽監督への就任は 1723 年)。2019 年に創業 300 年を祝っています。

バッハの曲を BWV 23、BWV 34 などの作品番号で呼びますが、ご存じのとおり、ドイツのバッハ学者、シュミーダーが 1950

■当団発行の日本語版楽譜・最新刊のための表紙デザイン。

底本版元ドイツ・ブライトコプフ社の提言により、日本語版でも意匠を揃えることとなった。

BWV 23 と BWV 34 の 2 冊をこの 3 月に出版する(内、右は BWV 23 の表紙)。



年に出版した『バッハ作品総目録』の分類番号によります。この目録の正式なタイトルはかなり長いのですが、それを思いっきり縮めて Bach-Werke-Verzeichnis(バッハ-作品-目録)と略称し、さらに頭文字をとって BWV(ベー・ヴェー・ファウ)と表わしたものの。この版元がブライトコプフ社で、昨年、最新の内容に改定されて第 3 版が出たばかりです。

要するに、バッハの音楽に携わろうとする者にとってはとても大切な出版社なのですが、そのブライトコプフ社から破格なお誘いがあったことは、何度かこの紙面でも触れてきたとおりです。つまり、上に掲げた表紙デザイン(ブライトコプフ社が創業 300 年を機に新たに使用を開始したもの。天使の装飾がかもす伝統の香りと深い赤の重量感!)を、われわれの日本語版でも使ったらいかがか、との提言でした。

一民間の小さな合唱団が自費で細々と出す楽譜に、その底本の版元、世界一の楽譜老舗からの夢のような

月報 2024 年 3 月号 CONTENTS

- ・新しい朝に目覚める喜び(大村恵美子)……p. 3
- ・おたより(眞田あゆみ)……p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [27](大野博人) p. 4



Breitkopf
& Härtel

EB 7023

Breitkopf & Härtel
Edition Breitkopf

日本語版 BK.023

Japanese Edition
BACH-CHOR, TOKYO



■当合唱団がこれまでに刊行した日本語版楽譜、各時期の表紙の色。左端のオレンジ装丁が「バッハ・カンタータ 50 曲選」(2000-2004)。その後も公演スケジュールに添って刊行。続刊の新規シリーズは、黄色 26 曲 (2007-2018)、1 冊おいてグレー (右端) 6 曲 (2019-2022)。白色は《昇天祭オラトリオ》(2022)。他に世俗カンタータ 2 曲を含む既刊在庫は 84 曲になった。

申し出をいただいたわけです。

東京バッハ合唱団は、創設以来、主宰者大村恵美子の訳詞による日本語上演を原則として今日に至っていますが、当初から数十年 (1962 年創立から 90 年代末) は、主宰者の訳詞書き込み楽譜を横において、輸入したまっさらの楽譜に、団員が各自で訳詞を書き写していたものです。われわれの訳詞演奏を評価する識者も現れていましたが、出版譜を作るなど思いつきもしませんでした。すでに訳詞上演を終えたカンタータは、当時で、優に 100 曲を超えていたでしょう。

そんな折、ある団員から、貴重な訳詞の業績を世に残したい、訳詞付きの楽譜を出版するべきだという意見があり、日本語版バッハ・カンタータ楽譜の誕生に至ります。西暦 2000 年のことでした。上演済みのレパートリーの中から、バッハの教会カンタータを代表する名曲 50 曲を選び、年に 10 曲ずつ制作して 5 か年で『バッハ・カンタータ 50 曲選』(全 50 冊、上掲写真の左端・オレンジ色表紙のシリーズ) を世に出しました。

◆日本語版の発刊、何故ブライトコプフ版か？

今日バッハのカンタータを演奏するにあたり、独唱・合唱の使用楽譜 (ヴォーカルスコア) は大きな出版社だけでも複数の版元から選べます。なかでも、現代科学の粋を活かした厳密な校訂による「新バッハ全集」(2007 年に完結) を基礎にしたベーレンライター社のものが定評がありますし、東京バッハ合唱団でも大いに使わせていただいています。

しかし、われわれが事を起こそうとした 1990 年代には、ベーレンライター社のレパートリーはわずかな数の人気曲に限られており、訳詞楽譜を「体系的に」出版しようとする企画の底本にはそぐわなかったのです。その当時すでに「Edition Breitkopf 7000」シリーズとして、現存カンタータの全曲を網羅していたブライトコプフ社のヴォーカルスコアは、「旧バッハ全集」を基に編集・制作された経緯があり、中にはその後の改定や訂正・補筆を必要とするものがありましたが、ブライトコプフ社は、新バッハ全集版などを参照しつ

つ、丁寧な補訂を重ねています。われわれの合唱団が必要とするのは、学者の緻密さでいつまでも歌う日を待つことではなく、母語で歌って、バッハの音楽の息吹に一刻も早く、かつ長くたっぷりと触れること、そう意を決して、ブライトコプフ社との著作権交渉を始めました。4 半世紀以上も前のことでした。

「50 曲選」完結 (2004 年) 後も同社との契約は維持され、われわれの日本語版シリーズは、公演計画に沿って新規に出版を重ねながら今日にいたっています。2022 年、当合唱団の 60 周年にあたり、ブライトコプフ社の社長ニック・プフェッファコルン氏から、われわれの演奏実績と日本語版楽譜の実現に関してメッセージが寄せられました (月報 715 号、2022 年 1 月)。

私たちは、ヨーロッパで、とくに J・S・バッハの故国であるドイツにおいて、東京バッハ合唱団の輝かしい芸術的発展と卓越した演奏活動に、長年にわたり絶えることなく身近に接し、その歩みを見守りつづけることのできる立場にありました。

ブライトコプフ&ヘルテル社は、かつて J・S・バッハ自身が共に仕事をしたことのある出版社です。バッハの作品の言葉と音には、慰めをもたらし、人をひろく包み込む力があります。それが、あなた方の手によって、かくも見事に日本語に移され、それによって一層広範な人々のもとに届けられようようになりました。ブライトコプフ&ヘルテル社は、そのことに誇りと喜びを感じております。

わけても大村恵美子様へ、感謝申し上げます。あなたは、バッハの音楽とバッハのメッセージを、60 年を超える長きにわたって、日本の地に広めて来られたのであります。

ブライトコプフ社との良好な繋がりを想像していただけたと思います。

◆「日本語版バッハ・カンタータ楽譜全集」完結計画

約 200 曲とされるバッハ「教会」カンタータですが、偽作や断片での伝承などを除くと、現存の真作は 190 余曲です。その内、すでに日本語版楽譜として刊行したものは、このたびの新刊 2 曲を加えて 84 曲となりました。残された作品は 100 曲あまりです。

われわれが「完結計画」の構想を発表してから、すでに 2 年が経過します (詳細は、月報 717-718 号、2022 年 3-4 月など)。計画第 1 年次 (2022 年、全 12 曲) のうち世に出たものは、昨年の定演の演目として先行出版した BWV 11、12、22 の 3 曲のみですが、たびたび言及したとおり、昨年 3 月に、先方より「今後出版される版や再版される可能性のある版にもこのレイアウト

[新規の表紙意匠などのこと] を使用していただき、将来的にすべてのバッハカンタータで同じ



■新刊 2 曲: BWV 23 と BWV 34 (各 2100 円)。2 冊セット 5000 円 (送料込み、端数 500 円ほどはご寄付!) でお届けします。メールか電話で。

レイアウトになるようにしていただければ幸いです」との提言をいただいたのです。

そこで、一昨年発行した先行の3曲（上述）は、これまでの流れの最後の楽譜（従来の表紙）に位置づけ、新規デザインで上梓した今回の2曲をもって、完結計画の真のスタートとすることとしました。版下校了済みの残り9曲と計画第2年次（2023年）の予定曲（既刊の2曲BWV23と34を除いて）とで、刊行のスケジュールを再調整することになります。いろいろ少人数でこなしていますので、素早い進行とはいきませんがご理解ください。

新装丁版の、記念すべき最初の楽譜2曲、眺めるだけでもバッハ音楽の豊かな雰囲気にも包まれます。歌わない読者の皆さんにとっても、価値ある“飾り”になりますよ。財源の一助にご協力を（前ページ下の写真参照）。

主宰者大村恵美子のライフワーク、お見届けいただければ幸いです。

新しい朝に目覚める喜び

大村 恵美子（主宰者）

朝の気配に目覚めて時計を見ると、4時、5時、6時台の新しい日の早朝。まずこれで一日分の大喜び。深夜の場合、日付けが変わっていないとか、まだ2時、3時の闇で、起き出して何かするには早すぎると分かればガッカリして、「さあ、もっと寝なければ——。お休み、お休み」と、しゅしゅ自分に号令をかけて、掛け布団の中に深く潜る。健康な私は、素直に目を閉じて寝てしまう。こんなパターンが続いて、ここまで来てくれた。

これを繰り返しながら、たとえば身体の病弱や苦勞な心配ごとの多い人たちも、困っているのだろうに、と思いやっている。中には、負いきれない重荷に、神経や健康に異常をきたす方々もあるに違いないと思って、自分の幸に感謝、他人の不幸に同情し、祈りを献げる。

でも、例えば最近の大地震に、深い損害を蒙った方々を思うと、居ても立ってもいられなく、人生の厳しさに心を打たれるばかり。そんな、重い感じの日や、自分にはただ平穏な静かな夜明けを与えられた感謝などで、起きる早々、身の置き処に急がしくなる。

これが普通の人生だ。一日中横になって、読みたい本はいくらでもあるので、小さな文字を判読しようと

目をこらすと、老化の眼ではどうしても目が廻って読めない。姿勢を変えたり、電灯の置き方を変えたり、おち



■スイセン（さいたま市別所沼公演）撮影：千葉光雄（2023/3/20）

お・た・よ・り

眞田 あゆみ（元団員、沼津市在住）

月報1月号の大村先生の巻頭言「2024年、新年はどんな年に？」に感想を寄せたく、ペンをとりました。

「今年こそ、こんな情けない状態を抜け出て、何とかして、お互いを尊重して生き続けることに集中してみようではないか」とのことばに共鳴しました。

ウクライナもパレスティナも、戦火の止む気配が感じられません。

違いを認め合い、赦し合い、話し合い、生きることが大切ではないかと思います。対話外交が大切、と言われていますが、一向に進まないですね。本当にそう思うなら、実行してほしいと思います。

つくまでひと騒ぎ。それでもうまいかなくて、その読書を諦めることも殖えて来た。

愚痴ばかりここでこぼしているのではない。今の自分を引き立て、過去のように、一日を役立てるようにして、自分を納得させたいのだ。自分に愛想をつかしたりせず、今の段階でもまだ出来そうなことを、探しては生活を成り立たせれば……。

今のところ、私が一番嬉しいのは、幼少な児童に接することだ。ただ「ニコリ」を交し合うだけでも嬉しい。一言でもコトバをやりとりすれば最高。ムッチリしたアンヨの肌ざわりを許してもらえても幸福。好いことばかりに充ちている。

一昔前は、どこの家庭にも家族は多く、赤ん坊からおジいさん、おバアさん、教育に預かっている近い、あるいは遠い親戚の子供たちとか、1ダース位の家族人数はザラに存在した。今では、ひとり暮らし、夫婦だけ、恋人だけの2人暮らしも多くなっているのではないか？ つき合う友人も段々なくなり、自分をカマってくれる人もなくなり、誰にも知られないうちに餓死して、遺体で他人に見つけられる、という悲惨な人生の閉じ方も、結構多くなっているのではないだろうか。

私の訴えたいのは、そんな人たちがばかりになったら、私たちのことはもう「人間」とは言えないのではないかと、ということ。

元気なうちは、「人とのつき合いは面倒」と避けたがる人も、健康を壊して寝たきりになると、「誰にも見えない処で餓死」という人生の結末に陥って終わる。これは悲しい話だ。何も考えず、自分の生活対応だけに明け暮れしていると、こうなるのだろう。

どんなきっかけでも良いから、他人と話を交わし、友人を得るのは、人生の大切な仕事ではないのか？ 私はそう思っている。それだけでも大きな財産ではないのか。つまり、新しい朝を迎えて、挨拶だけでも交わし合える人間になるべきでは？ こんな処が、このお喋りの内容なのだろうか。

「友人を得よう」——これが、3月9日、93歳を迎える私の提案です。

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [37]



ご飯とパン

安曇野閑人 大野 博人

「ごはんフランスパン」

ん？ なんだ、それ？

最近、新しい家庭用パン焼き器を買った。説明書を見ると、作れるパンが多彩だ。食パン、ライ麦パン、天然酵母パン……。ピザ生地や餅、うどんまでできる。感心しながら、ページをめくっていたら、出てきたのがこれだ。

1.5斤分の材料は「強力粉 350g、冷めたごはん 100～150g……」。玄米や雑穀入りごはんも使えます、とある。

冷や飯でフランスパン！ レーズン・パンのレーズンみたいに、パンにごはん粒が散らばっているのか。ご飯をたくさん入れると、握り飯に似てくるのか。バターやジャムをつけて食べるのか、それとも、ふりかけや納豆がいいのか。つぎつぎと疑問が浮かぶ。

で、作ってみた。といっても、冷蔵庫から昨日の残りのご飯を出してきて、ほかの材料といっしょにパン焼き器に入れるだけ。あとはスイッチをオン。

焼き上がったのは、どう見てもパンだった。めし粒は見当たらない。「残パンというくらいだ。冷や飯もパンになっておかしくないのだ」などと納得しながら、口に入れる。悪くない。いや、おいしい。ちょっともちもちしていながら、フランスパンの香りもほのかに漂う。これなら、ふりかけよりバターだな。

「やっぱり、日仏の文化は調和できるのだ」と強引な一般化をしながら、朝食に「ごはんフランスパン」のトーストを味わっていて、20年あまり前のパリでの取材を思い出した。仏語による落語や漫才の公演だ。

そのイベントを企画し、自ら演じたのは、イヨネスコ作品の初演などで知られる演出家のニコラ・バタイユさん。日本で暮らした経験があり、NHKのフランス語講座にも出演していた。そのころに知った落語などの魅力をフランスに伝えるために仏語で演じることを思いついたという。演目は、バタイユさんが独演する「あくび指南」と「芝浜」。それに俳優との掛け合い漫才に翻案した「そこつ長屋」。

落語は座布団ではなく、椅子に腰掛けた洋服姿。それでも扇子を手にした話しぶりは、仏語であることを忘れさせるほど。ミカンをむいたり、こたつに入ったりという仕草も自然で、「芝浜」では大晦日の雰囲気をもごとに描き出していた。

江戸庶民の生活は現代のフランス人とは縁がない。だが、酒飲みの亭主を女房が立ち直らせるという物語は、人情話を得意とした仏作家のマルセル・パニョル

ごはんフランスパン / フランス



準備 ①パンケースに、パン羽根をセットする。
(P.16) ②(ドライイースト以外の)小麦粉・水などをパンケースに入れる。
③パンケースを本体にセットし、イースト容器にドライイーストを入れ

材料

「ごはんフランスパン」	(1.5斤分) 1576 kcal (ごはん 150g のとき)
強力粉	350g
冷めたごはん(白米)	100～150g
砂糖	8.5g(大1)
塩	7.5g(小1½)
冷水(5℃)*	230g(mL)
ドライイースト	3.5g(小1½)

*室温25℃以上のときは、10g(mL)減らして使う。

●白米の代わりに、玄米や雑穀入りごはんも使えます。

1 ごはんフランスパン： 表示させる



■レーズンなどの具材

■出来上がり時刻を予

■写真は、作ったパンを食べちゃったので、パン焼き器の取扱説明書というぱっとしないものになってしまいました。すみません。というわけで説明は「ごはんフランスパンの作り方が載っているパン焼き器の取扱説明書」です。

(写真提供・説明とも筆者)

をほうふつとさせるし、自分の遺体を引き取りに行くという荒唐無稽な「そこつ長屋」はシュールレアリズムの笑いにつながる。バタイユさんはそう話していた。

実際、会場に来ていたフランス人もしんみりしたり大笑いしたり。その日は、俳優がギターを手にやはり仏語で演歌「名月赤城山」や「月形半平太」も披露。こちらは大受けだった。

私たちは、外国に旅行したり、外国人と話したりしたとき、そのちがいに関心を向けがちだ。けれど、留学ではじめてパリに住んだとき、私は反対のことに気づいた。

ジャーナリスト学校の級友たち約30人は、国籍も背景の文化もバラバラ。しかしそんなちがいより、おもしろかったのは共通しているところだった。出身がアジアだろうとアフリカだろうと欧州だろうと、なにがニュースかという感覚はけっこう近かった。たしかに、取材の流儀や記事のスタイルはいくらかちがった。けれど、それも説明し合うと、たいてい「なるほどね」となった。ちがっていても、わかり合うことはむずかしくなかった。

外国語を学んだり外国の文化に触れたりするのは、「ちがうこと」を知る喜びに通じる。けれど、「同じこと」に気がつく楽しさでもある。

麦も米も穀類、フランス人も日本人も人間。結局、そんなにかげ離れているわけではない。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)